
生涯学習開発財団 2020(令和2)年度 博士号取得支援事業
【募集要項】

■採用予定人数

特に人数は定めません。

■助成金の支給

- ・支給金額は1人あたり50万円
- ・支給日は2021年3月(予定)
- ・下記の項目にあてはまる事態が生じた場合、助成の取り消しをします。
 - ①申込書に虚偽の内容が記載されていることが判明した場合。
 - ②対象者から活動状況の報告がなく、あるいはその内容が不適切と判断される場合。
 - ③その他、当財団との信頼関係を著しく損ねる行為があった場合。

■応募資格

以下の条件を満たす者

- ・50歳以上(性別、国籍、所属を問わない)
- ・日本国内に在住している者
- ・博士課程(博士後期課程を含む)に在籍するか、論文博士号の取得をめざし、かつ実行性の高い研究計画書を作成した者もしくは博士論文の一部をすでに作成した者
- ・日本国内の大学で博士号を取得予定の者
- ・当財団のホームページ及び情報誌にて、氏名・年齢・研究タイトル・写真の公開を了承する者

■応募方法

・提出書類

- ①指定申請書(Wordファイルあり)
- ②身元証明書(在学証明書、住民票、外国人登録済み証明書など)
- ③研究計画書(①とは別に必要です。ただし特定の書式はありません)
- ④学業成績証明書(直近のもの。ただし、博士課程に在籍する者のみ)
- ⑤完成した論文のコピー(部分可。ただし、博士課程に在籍せず、論文博士を目指す者のみ)
- ⑥指導教授の推薦書(博士課程に在籍する者)
- ⑦論文指導をする者(論文提出先の者が望ましい)の推薦書

(注) 博士課程に在籍中の応募者は①②③④⑥を、博士論文を執筆中の応募者は①②③⑤⑦の提出をお願いします。なお、⑤は任意提出

・応募締切日

2020年12月11日(金) 必着

■選考

- ・提出書類および面接により選考を行います。
 - ・書類選考の上、面接を行う予定ですが、面接の日程など詳細については対象の方のみ、申請書にご記入いただいたメールアドレスにメールするか、あるいはご記入の住所に送付します。
 - ・合否の最終通知は本人の住所宛に送付します。
-

募集
開始

2020(令和2)年度

博士号

取得支援事業

生涯学習開発財団は、「人間は感動する心を失わず、何ごとかを学び続ける限り、年齢にとらわれない生き方をすることができる」という理念のもと1983年に設立されました。

平均寿命が延びる今、定年後も学習を継続し、社会へ貢献し続ける中高年の存在は、日本社会にとって大きな支えとなります。

財団では、現在博士号の取得を目指す50歳以上の方々を対象に、2011年度から支援事業を行っております。この取り組みを通して、来るべき高齢化社会の生涯学習を促進し、よりよい社会作りに貢献することをめざしています。

本事業は、国籍や性別を問わず、また、研究領域は文系・理系を問いません。独創的で社会的な意義のある研究を行い、博士論文を執筆中あるいは提出が予定されているすべての方に門戸は開かれています。皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

■ 採用予定人数

特に人数は定めません。

■ 助成金の支給

- ・支給金額は一人あたり50万円
- ・支給日は2021年3月(予定)

■ 応募資格

以下の条件を満たす者

- ・50歳以上(性別、国籍、所属を問わない)
- ・日本国内に在住している者
- ・博士課程(博士後期課程を含む)に在籍するか、論文博士号の取得をめざし、かつ実行性の高い研究計画書を作成した者、もしくは博士論文の一部をすでに作成した者
- ・日本国内の大学で博士号を取得予定の者

- ・当財団のホームページ及び情報誌にて、氏名・年齢・研究タイトル・写真の公開を了承する者

■ 応募方法

(1) 提出書類

- ・指定申請書
- ・身元証明書
- ・研究計画書
- ・推薦書 ほか

詳細は募集要項でご確認ください

(2) 応募締切日

2020年12月11日(金) 必着

■ 選考

提出書類および面接により選考

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法人 生涯学習開発財団 博士号取得支援事業部
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-20 虎ノ門実業会館9階 TEL 03-3508-4551
募集要項・申請書は → <http://www.gllc.or.jp> E-mail hakushi@gllc.or.jp



吉澤厚文 さん(取得時60歳)

【論文テーマ】Safety IIの概念を用いた緊急時対応力向上のための学習システムの提案 —福島第一原子力発電所事故対応への適用による実証研究—
想定外に対処できるのは、機器やマニュアルではなく人間の能力

吉澤厚文さんは、2011年3月の福島第一原子力発電所の事故を現場で体験し、1年間事故対応にもあたった一人である。安全対策の何がいけなかったのか自問自答する中、「Safety II」に出会った。東北大学の北村正晴名誉教授が初めて日本に導入しようとしていた、新しい安全に対する概念で、原発事故の当事者として絶対に学ばなくてはと直感し、2014年に北村先生らと研究会を立ち上げた。研究会は110回を超え、現在も続く。

2016年、研究をまとめて社会還元を図るために、博士号へのチャレンジを決心した。費用や時間の面を考慮し、自身が非常勤講師をしていた長岡技術科学大学で論文博士の道を選んだ。

■事故や災害からどう回復させたかに注目

従来の安全の概念である「Safety I」では、大きな事故が起きた際、「なぜこんな事故が起きたのか」と原因を究明し、報告書にまとめる。その失敗を学ぶことで再発防止を図ろうというのが、英国の航空業界で始まり1世紀以上続く学習法だ。

「台風で千葉県が大変な状況になっていますが、『想定を超えた災害が起きてしまった』では済まないわけです。そこからどうやって回復するか、どうやって被害の拡大を防止するかが現実の大問題なのですが、その部分は事故報告書の中では取り扱われません。事故や災害からどう立て直したのかという物語を共有し、学習できる仕組みを作っていくことで、より強い社会の安全を築いていけるだろう、というのが私が考えたことです」

■マニュアルにはない原子炉への海水注入

確かに事故の多くはヒューマンエラーが原因で、Safety Iでは、人はミスをする厄介なものとして位置づけられているが、どうやって回復させたのかを見ていくと、人こそが対処方法を生み出す能力を持っていると吉澤さんは位置づける。

「原発事故と言えば、消防車を使って原子炉の中に海水を入れるという方法はどのマニュアルにも載っていません。津波で押し寄せた海水を逆手にとって利用してしまおうと、その場で人が考えた方法なんです。また、計測器の電源を失い数値が見えなくなった時は、みんなの車からバッテリーを集めて電源にして計測をしました。いかにリスクを下げるというよりも、回復のチャンスを拡大させるものは何なのかを、瞬時に考え抜いて選んだ方法だと思

います。そうしたさまざまな工夫が行われて、事故の進展が食い止められ、懸念されたさらなる『最悪の事態』を回避し収束に向かったのです。

想定を超えた場面で対処できるのは、機器やマニュアルではなく、唯一人間の能力です。どういう能力をどんなふうにも高めればいいのかという方法論を、論文を通じて具体的に提案しています」

事故や災害対応にあたって吉澤さんが注目する4つの能力がある。①起きていることに最低限、対処する能力。②過去に何が起きたかを知る学習能力。③今何が起きているか監視する能力。④将来どんなことが起こるか予見する能力。この4つを平時にどれだけ高めているかが、緊急時に対応力を発揮できるかどうか1つの指標になる。

■挫折から立ち上がるエネルギーを

2018年に吉澤さんの論文の1つが日本人間工学会の論文賞を受賞して注目され、エネルギー関連のほか、運送、医療などさまざまな業界から講演依頼が来ている。そうした場で自分の反省やこれからの課題を話しながら普及させ、世の中の事故や災害の被害抑制のために活かしていきたいという。

「私にとって福島原発事故は挫折でしたが、人生は山あり谷ありです。谷になった時に、次に向かっていくエネルギーをどう生み出していくか。私の先輩に、人生の谷底から博士号をめざし取得した方がいて、私は感銘を受けました。私の体験がみなさんの役に立てば幸いです。もし挫折しても、ぜひ自分の力を信じ立ち上がってください」



財団の助成金は、査読論文を掲載する費用や論文をまとめるためのパソコン購入費に充当し、助かったそうだ。

高木紀久子さん(取得時59歳)

「論文テーマ」現代美術家による作品「コンセプト」の生成プロセスの解明 アーティストに「神様が降りる」メカニズムを科学してみた

■空からアイデアが降ってくる訳がない

高木紀久子さんは多摩美術大学出身。アーティスト活動と並行して、専門学校でデザインを教える。多くのアーティストは、次の作品に対して苦しみ苦しんでいる中、急に光が見え、そこからはスイスイと創造的な新作ができあがってしまふ、そんな経験をしている。「神が降りた」と表現する者もいる。創作の課題に取り組む学生たちも同様だ。一部の天才だけにあるスイッチではない。ましてや空からアイデアが降ってくる訳はない。そのメカニズムを知りたかったが学術的資料はなく、高木さん自身が研究することになった。門を叩いたのは、科学と芸術を認知科学の領域で扱う東京大学学際情報学府の岡田猛教授。入試面接では「非常に面白い反面、捉えにくいことをやるう」と言われた。

■ずらしが想定外のずれを生む

アーティストの内的なものをどう捉えるか。現代美術作家の篠原猛史さんが、東大の駒場美術博物館で展覧会をやった際の、企画から展示まで約10か月、13回に渡るインタビューが研究室にあった。全く別の研究のために録られたものだったが、独特の表現や用語がネックとなり、お蔵入りになっていたものだ。それが、同じアーティストとしての立ち位置から読める高木さんには宝の山だった。なぜこういふ言い方になるのか、手にとるようにわかった。その内面で起きていることも非常に面白かった。

「気づきや発見は、突然神様が教えてくれるものではなく、プロセスを経て漸進的に進むのです。一

■最初の論文が後押ししてくれた

一般の人が「飯のおかずを考えるときなどに使う認知プロセスを使っています。それと、岡田教授が発表した『類推的ずらし』。新しいものを作ろうと既存のやり方の一部を変更する認知プロセスですが、私は『ずらしがずれを伴う』ということ、修士課程の1本目の論文の中で主張しました。想定外の、偶然生じたずれが新しい発見につながるということ。毎日の小さなずれが、ある日、はっと気がつく大きなずれを生じ、それを見て驚く。一般人はその驚きを失敗と解釈しやすいが、アーティストやデザイナーはそれをうまく利用します」

■最初の論文が後押ししてくれた

苦労したのは、それを認知科学としての方法論で明らかにし、発見を証明すること。心理学や統計に関しては大学院の授業だけでは間に合わず、1、2



現在準備中の(GLLC博士の会)の幹事会にも出席。「参加者にも財団にも宝物になるのではと期待しています」

年生の授業もとって基礎からやり直した。仕事をしながらの論文は時間的には厳しかったが、1本目の論文が後押ししてくれた。その論文は、テーマの新規性からあちこちで引用され、国内外の学会からリアクションをもらった。それが自信になり、中途半端で終わらせられない理由にもなった。

■知見を活かせるポジションに

修士課程も入れて博士号取得まで足掛け8年かかったが、それには理由がある。2017年、東大で初めて芸術関係の実践的な授業や連携研究を行う、東京大学芸術創造連携研究機構の開設に向けて準備が始まった。機構のスローガンは「アートで知性を拡張し、社会の未来を開く」。科学的研究においてイノベーションを起こすためのヒントや基軸が、アートにあると考える7つの研究科が、文理横断で取り進むことになった。高木さんは、仕上げ直前の博士論文を棚上げて単位満期退学、機構の運営者兼特任教員として就任した。2年後の今年5月、博士号取得と機構のスタートはほぼ同時だった。

「一般の人も日常使っているプロセスなので、ぜひ創作をしながらビジネスや研究にも生かしてほしいです。また美大卒業後も頑張って作家活動を続けている方たちに、そういうプロセスがあることを知ってもらい、創作支援につながればと思います。」

松田妙子先生がそうだったように、研究の場では年齢は関係なかったです。むしろ、何のために自分が大学にいるのか明確なところが、財団の支援対象になる社会人学生には強みになりますよ」

2019（令和1年度）

50歳以上「博士号取得支援事業」

助成金授与者決定

2019年度・博士号取得支援事業合格者の授与式は、2020年3月18日に生涯学習開発財団事務所で行われる予定だったが、コロナウイルス感染症拡大防止のため延期された。合格者7名とその研究テーマは以下の通り。

●合格者と研究テーマ

足立昌哉（53歳）

「偏光技術を活用した電子ディスプレイの光利用効率の向上と視野角制御に関する研究」

内藤真弓（63歳）

「子育て女性医師の就業継続とジェンダー構造に関する研究」

伊藤茂康（66歳）

「中性子の電気双極子モーメントの探求」

中山昭二（63歳）

「道路橋鉄筋コンクリート床版の内部水平ひび割れ検出法開発に関する研究」

金山義男（56歳）

「非接触排泄計測システムに関する研究」

林 竹人（71歳）

「絵師 高田敬輔が描く浄土の世界
―「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」を中心として―」

坂槇義夫（55歳）

「木質ラーメン及び木質ラーメン内に耐力壁を設置した構面の許容せん断耐力評価に関する研究」